

## 第6章

# パレスチナ人意識と離散パレスチナ人社会

——ヨルダンにおけるパレスチナの  
「村」の復活を事例として——

### はじめに

本稿では、離散パレスチナ人の社会意識のあり方を、離散前のパレスチナの「村」の具体的な姿を再現し、それと対照しつつ、異郷においてパレスチナ人の「村」(qarya)が「復活」しているという出来事を通じて明らかにする。ここでいう「村」の「復活」というのは、パレスチナ人が離散の地において「村」を同郷組織として主体的に再組織化しようとしている試みのことである。

社会意識を、客観的な存在諸条件に規定されつつ、ある社会集団の成員によって共有されている意識とするならば、パレスチナ人の社会意識のあり方は異郷における「村」の「復活」に反映されていると考えることができよう。しかし、社会意識が現在の状況の単なる関数でない以上、生活史の全体的な把握、すなわち、過去の生活の諸条件をも把握した上で、「村」の「復活」に投影された離散パレスチナ人の社会意識のあり方も解明されるものでなければならない。

離散状態にあるパレスチナ人の社会意識のあり方に関しては、個人としてのパレスチナ人がパレスチナ人難民受け入れホスト国(異郷)の社会において

疎外されていると感じ、同時にパレスチナ人を難民として受け入れた社会からは「パレスチナ人」という他者として差異化された社会集団として規定されているという心理的・社会的側面を指摘することができる。すなわち、この主観的に共通する疎外意識と、差異化された社会集団としての客観的な規定との両者が交差するところにパレスチナ人アイデンティティ (al-hūwīya al-filastīniya) の形成の一般的な契機を見いだすことができる。また社会的存在の諸条件の観点から言及すれば、多くのパレスチナ人が難民キャンプに居住しているという生活状態は、日常生活においてパレスチナ人がパレスチナ人であることの共同性を支えていると同時に、外部社会との差異性をも際立たせることになっている。もちろん、居住形態にみることのできる、内に対する共同性と外に対する差異性の交差のあり方はパレスチナ人の離散した地域によって異なり、ホスト国の政治権力（イスラエル占領地、レバノン、シリア、ヨルダン）によるパレスチナ人難民に対する政治的・社会的な支配形態との関係において個別にとらえる必要があると思われる。

本稿で特に問題にしたのは、歴史的に蓄積されてきた社会意識の伝承という観点から、離散前のパレスチナの「村」と離散後の難民キャンプとの両者におけるハムーラ（父方単系親族集団〈ḥamūla〉）という血縁集団の役割に注目し<sup>(1)</sup>、パレスチナ人の社会意識のあり方における家父長制的契機を検討することである。ここではハムーラをパレスチナ人社会の家父長制として典型的に理解することになるが、その際、分析概念としての家父長制は、伝統に基づく恣意的な権力をもつ家父長（ムフタール〈mukhtār〉）<sup>(2)</sup>による支配とそれへの成員による服従と規定する。

ところで、これまでのパレスチナ研究はパレスチナ民族解放運動への関心を中心としたものであったといっても過言ではない<sup>(3)</sup>。しかしながら、近年、パレスチナ研究も多様化の方向をたどり、知識人によって指導された民族解放運動という「政治運動」の視点からだけでなく、解放運動そのものを根底において支えたパレスチナ民衆、特にパレスチナでの人口の圧倒的多数を占めていた農民への関心が高まっている。現在、かつてのパレスチナ農民の

ほとんどはイスラエル占領地やアラブ諸国で難民としてキャンプで暮しているのである。

パレスチナ農民の研究はそれぞれの分野での実証的な研究が徐々にではあるが積み重ねられており、社会学、人類学、社会経済史、社会史などの分野での知見が取り込まれ、その議論は以前に比べはるかに深化されているといえる。しかし、厳しい政治状況が続いているためにフィールド・ワークなどに基づく研究は必ずしも十分であるとはいえない。とはいうものの、パレスチナでは農民であった人々から主に構成されているパレスチナ人難民社会、特にレバノンのそれへの関心がパレスチナ民衆像の再構築の観点から行われてきた<sup>(4)</sup>。このような関心と並行して、パレスチナの地の記憶を実際に留めている長老などからの聞き取り調査を行ったフォークロアの収集などを含めた民俗学での地道な蓄積も見逃すことはできない<sup>(5)</sup>。

以上のような研究の方向性を支えているのは、大部分のパレスチナ人が現在に至るまで離散状態にあるという現実である。パレスチナ人自身が1948年までパレスチナの地で培い、育んできたパレスチナの文化が占領と離散という現実のなかで危機にさらされているからにほかならない。さらに、イスラエルによる占領地での過酷な政策がパレスチナ人の民族的危機感をつのらせている。この点に関しては、アラブ諸国のパレスチナ人についてもある程度は当てはまる。

本稿との関連で最も注目すべき研究プロジェクトを行っているのはイスラエル占領地ヨルダン川西岸にあるビールゼート大学資料研究センターであり、同センターは「破壊されたパレスチナ村落」シリーズを刊行している<sup>(6)</sup>。このシリーズは聞き取り調査に基づき、1948年停戦ライン内にあったが40年代から50年代にかけてイスラエルによって破壊されたパレスチナ村落を、村落の起源と歴史、ハムーラ(またはアーイラ)、40年代の状況、戦争と離散という共通のテーマでまとめたものである。このような調査研究が行わなければならないのは、イスラエル建国によって離散状態になったパレスチナ人のなかでも48年以前のパレスチナを知る長老が少なくなり、記録を残すということが

急務になっているという状況もあるが<sup>7)</sup>、同時に、ヨルダン川西岸・ガザにおいても1948年停戦ライン内で起こったようなパレスチナ村落破壊が「ユダヤ化」政策のもとに進みつつあるという現実が存在するからにほかならない。

本稿の関心もこのような研究動向に連なるものであるが、離散パレスチナ人の社会意識の家父長制的契機の解明という観点から、ここでは一人のパレスチナ人の離散体験の具体的記述を出発点として(第1節)、ハムーラの役割への関心を中心に据えて、まず、離散前のパレスチナのアップーシーヤ村の状況と村人のジハード(第2節)、そして、離散パレスチナ人の状況を社会的・心理的観点から分析し、ヨルダンでの「村」の「復活」、すなわち、同郷組織の設立(第3節)を事例に考えてみたい。

## 第1節 何故アップーシーヤ村なのか

### 1. パレスチナ人の社会意識を分析するための方法と資料

本章で対象とするパレスチナの村落は、現在はイスラエルの一都市となり、パレスチナ人がまったく住んでいないアル・アップーシーヤ al-‘Abbāsīya 村(以下、アップーシーヤ)である。この村を取り上げるのは、筆者がヨルダン・ハーシム王国の首都アンマンに滞在中(1984年11月～1987年3月)にインフォーマントとして情報を提供してくれたのがアップーシーヤ村出身のパレスチナ人アブー・ムハンマド(仮名)であったという偶然の理由による<sup>8)</sup>。しかし、ここでオーラル・ヒストリーの方法に依拠しつつ一個人の体験を出発点として議論を展開するのは、パレスチナ解放運動の政治指導者なしは政治運動ばかりに目を奪われてしまい、具体的なパレスチナ人像が捨象されてしまっている研究動向全般への反省を込めてである。したがって、パレスチナ人研究者にしばしばみられる傾向ともいえる、パレスチナ国家建設を目標とするパレスチナ解放運動におけるパレスチナ人としての政治的・社

会的意識の高揚とその組織的な発展(つまりパレスチナ解放機構の発展)を軸に据えて議論することはしない<sup>9)</sup>。ここではパレスチナ民族主義(al-waṭaniyya al-filasṭīniyya)というマクロなレベルでの議論ではなく、個人からみた場合直接帰属していると感じているミクロなレベルでの社会集団を分析の単位として設定する。同時に、ここでヨルダンのパレスチナ人をあえて取り上げるのは、ヨルダンのような政治的な活動をほとんど封じ込められてきた歴史をもつ状況の中で生活するパレスチナ人がどのように自分たちを組織化しようとしているのかという関心からでもある。

以上が、ヨルダンのパレスチナ人たちが非政治的なレベルで自分たちの属している社会集団をどのようにとらえているのかという設問を設定した動機である。そこで、筆者がパレスチナ人の社会意識の家父長制的契機という問題を考えるにあたって重要視したいのは次の点である。つまり、個人としてのパレスチナ人が、離散の体験を通じて、自分の属している社会集団をどのようにとらえてきたのか、またその社会集団は離散パレスチナ人社会においてどのような形態をとっているのか、ということである。たしかに、一人のパレスチナ人にとって、離散の前後では、生活形態はまったく変わってしまう。しかし、パレスチナ人社会のほとんどが集団で短期間のうちに離散してしまったという事実から判断すると、主観的には自分が属している社会集団が何であるのか、また、その社会集団内における成員間の相互関係はいかなるものであるのかについての認識のあり方、つまり社会意識については、過去の枠組みを維持したのではないかと想定することは許されよう。なぜなら、離散の前後の外的な環境の変化は余りにも急激であったために、ほとんどのパレスチナ人はしばらくは客観的には自分の置かれている状況を判断できず、それまでの社会集団の規範に従って生活せざるをえなかったと考えられるからである。

それでは、離散パレスチナ人の社会意識を直接映し出している社会集団とは何であるのか。筆者のヨルダンにおける非常に限られた範囲での経験に基づけば、それは「村」であり、また、「村」を構成する主要な社会単位である

ハムーラであるといえる。それは以下の理由によってである。

パレスチナ人難民たちが離散の体験を語る際に共通するのはパレスチナの「村」の記憶である（むろん、都市出身者はその「まち」ということになる）。パレスチナ人が個人としてパレスチナを語る時、自分にとっての小宇宙であった「村（＝出身地域社会）」の記憶がパレスチナの具体的イメージに重なっている。このことはまた、現在でもパレスチナ人の親たちが自分の子供たちにも出身地として、パレスチナの「村」の名前を語り継いでいることにも表われている。したがって、個人の体験の中でのパレスチナは「村」の同心円上にあるものとして感じられていると想定することができ、パレスチナの記憶を「村」の記憶で代替することは許容されると思われる。つまり、「村」のイメージは個々人によって多数の中心を持ちながらも結局パレスチナに収斂してゆくともいうことができよう。

次に、パレスチナ人が離散の体験を語る場合、遡及していく中心的な「事件」は当然ながら、いかにしてパレスチナの「村」を離れたか、である。パレスチナ人にとってこのテーマの重要性和継続性については文学作品のみならず、多くの記録が出版されていることから窺い知ることができる。したがって、パレスチナ人のアイデンティティーの形成の直接的な契機はこの離散の瞬間の体験であるともいえる。それも「村」全体が根こそぎパレスチナの土地から切り離されるという体験であり、ほとんどのパレスチナ人が共有している体験である。この場合にも、個人的な体験と「村」全体の体験が個人の意識の中では重層的に重なっていることを指摘できる。

同時に、個人にとっての離散の瞬間の体験は本人にとってはまったく与り知らぬ過酷な運命の全体の波のうねりのなかで受動的なものであった。しかし、パレスチナ人が離散する際、「村」を単位としてシオニストという他者への抵抗も伴っていたことも重要な意味を持ってくる。したがって、「村」の記憶を語ることににおいては「村」での抵抗（ジハード）のための組織化ということも重要な要因となってくるのである。アッバーシーヤ村の場合、ハサン・サラーマという当時35歳にすぎない「シャイフ」であり、「バトル（ヒーロー）」

であった人物が象徴的な役割を果たした。なぜなら、彼はシオニストにアップスィーヤ村を占領されてから(1948年5月5日)、農民たちがたとえ一時的ではあっても再度同村を奪還する(同年6月11日)わずか10日前に「シャヒード(殉教者)」として戦死したからであった。村の抵抗はサラームと重ねられて語られることが多いのである。このジハードの経験もそれぞれの「村」ごとにそれぞれのヒーローを持っており、ずっと語り継がれている。

「村」の記憶、離散の瞬間の体験、そしてシオニストという他者に対する抵抗という3つの要因は「村」という具体的な場に関わっているが、個人と「村」を結びつける場合、これを接合する役割を果たしているのが、ハムーラという血縁的社会集団の単位である。このハムーラの集団としての結合原理は家父長制であるといえよう。ハムーラはパレスチナ人の社会意識を考えるうえできわめて重要な要因となっている。特に、ジハードのヒーローは家父長のイメージとだぶらされていることや、ジハードの組織化がハムーラを通じてなされたことは、家父長制の議論に関しいくつかの留保を投げかける。後に検討するように、このパレスチナ人社会の家父長制(=ハムーラ)を「伝統的」制度とのみとらえ、結局は「近代化」の中で解体するという単系的発展論の議論は早計のように思われる。つまり、難民キャンプにおけるハムーラの残存をもって「伝統的」とする議論に対して異なった角度から議論する必要性があろう。

本章において利用する資料に関しては、アップスィーヤ村出身のインフォーマントが筆者に語った情報が中心になることはいうまでもない。ただし、インフォーマントの情報のうち、文献資料でも確認できる点はその文献を挙げることにする。しかし、インフォーマントの情報は断片的で曖昧な点も少なくなかったので、インフォーマントによって提供された同じ村の出身者が書いた小冊子をも主要な資料とした。また、同じヤーファー県にあり、アップスィーヤ村に近い位置にあるサラマ村(Salama)に関する調査報告をも必要な限りにおいて資料として参照した。

## 2. あるパレスチナ人の個人史

以下において、筆者のインフォーマントであったアブー・ムハンマドの個人史を、前述した「村」の記憶、離散の瞬間の体験、シオニストという他者に対する抵抗などを中心に、簡単に述べてみたい。

アブー・ムハンマドは1936年にヤーファー近郊のアッパースィーヤ村に生まれた。彼の家族はバターンジャ・ハムーラに属していた。彼自身は村で最大のハムーラ出身であることを誇りにしていた。両親とも敬虔なムスリムで、自作の百姓（ファッラーフ）であった。彼が生まれた年にパレスチナではユダヤ人移民の増加に反対するアラブ大反乱が始まった。

1948年彼が12歳の時にパレスチナの村を離れざるをえなくなった。したがって、彼の記憶のなかのパレスチナは農村の風景であり、村の記憶は農作業に結びついたものばかりであった。すなわち、オレンジやオリーブの木々、小麦畑、井戸、農機具、馬、パンを焼くための丸い鉄板（*tābūna*）など具体的なモノの集積であった。これらのモノは、後の離散生活における貧困の体験とは対照的に、パレスチナの豊かさを象徴するものとして記憶されている。

一方、離散の瞬間の記憶と村人のジハードの記憶に関してはきわめて鮮明であった。彼自身の記憶とともに、年長者からその後継り返し聞かされ、彼自身も現在に至っても自分の子供に語り継いでいる。

アブー・ムハンマドの離散の瞬間の体験は次のようなものであった（以下の記述に関しては「アッパースィーヤ村周辺地図」参照）。パレスチナ戦争（1948年5月15日）が始まる前の4月15日、アッパースィーヤ村の近くにある戦略的拠点テル・リトヴィンスキー基地がユダヤ人の手に落ちたため、危険を避けるために、父親と年長の兄たち以外の家族と共に一時的にアッパースィーヤ村を離れたのであった。

当時の様子を彼は、次のように語っている。「父がキャンプ・アル・バナ-



トの警護から帰ってくると、母ファーティマに、子供たちを連れてすぐに逃げなさい、といった。母はその時パンを焼いていた。あまり急なことだったので、私たちは誰も靴を履く余裕もありませんでした。」それはユダヤ人の軍隊がリッダ空港を攻撃したとのことだったが、夜だったのでその時の銃弾の流れが子供の目には花火のように美しかったと語っている。

そのままデイル・タリーフに行った。村人たちは、避難してきたアッバースイヤ村の人々にどうして逃げてきたんだ、と質問したが、その村人も翌日には一緒に逃げることになってしまった。一家はデイル・タリーフのおじの家に行ってみたが、もう誰もいなかった。そこで、ベイト・ナバーラに向かった。着いてみると人っ子ひとりいなかった。

さらに、プトルス村まで歩いていった。ここで、彼は赤い模様のハッタ(頭巾)を着けたヨルダン軍の兵隊たちが数台のトラックでベイト・ナバーラとリッダ方面へ進むのを見た。彼の家族が村を避難してから1カ月してパレスチナ戦争が開始されたのである。5月14日、イスラエルが建国を宣言し、15日アラブ諸国軍がパレスチナに侵攻した。しかし、結局、彼はこのヨルダン軍がすぐにプトルスに戻ってくるのを目撃することになる。プトルスからの生活は野宿で、オリーブの木の下で寝ることになった。さらにキブヤ村まで行った。そこで父方のおじが迎えに来て、デイル・カッディースに連れていてくれた。そこには母方のおばがいて、何とか食事にありつけた。父親がジハードの義勇兵として参加した戦闘から戻ってきた。それは村の最終的な陥落を意味した。それからベイト・リーマーに移り、テント生活が始まり、そこで数か月間を過ごした。ただ、その村には3キロ離れた場所にしか水がなかった。

家族と共にヨルダン峡谷のアリーハー(ジェリコ)近郊のアクバット・ジャブル・パレスチナ難民キャンプ(Mukhayyam 'Aqbat Jabr)に身を寄せた。テント生活であったが、そのテントも太陽と風のためにズタズタになり、木とトタンで小屋を建てた。最悪の環境のなかでUNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)の食糧援助で生き延びた。YMCA(キリスト教青年会)がボ



ランティアで行う学校(キリスト教学校 al-madrassa al-masīḥiyyaと呼ばれた)に行ったが、遊んでばかりいたという記憶しかない。後にUNRWAが学校(YMCAの学校に対しアラブ学校 al-madrassa al-‘arabiyya と呼ばれた)を建設し、アブー・ムハンマドはUNRWA管理下の中・高等学校で学び、1959年に卒業した。それから、エルサレムのハッティーヤ専門学校で教育を受け、エジプトのタウジーヒー(大学入学資格)を取得した。その後、アクラバ村(ナーブルスから6キロ)で代用教員となって働き、父方のおじの娘と結婚した(アラブ地域で広く行われている結婚形態である父方平行イトコ婚であった)。また、ベイルートにあるアラブ大学の通信教育で図書館司書の資格も取得した。

長女が生まれてすぐにアルジェリアのワハラーンにアラビア語教師として出稼ぎに出かけた(1964~68年)。しかし、1967年の戦争でヨルダン川西岸がイスラエルによって占領されたことを知り、状況が落ち着いた段階でアンマンに戻った。以前住んでいたヨルダン峡谷のアクバット・ジャブル難民キャンプはイスラエル占領下に入ったため戻ることができなかった。風の便りで、アッパースィーヤ村出身の多くの人々がアクバット・ジャブル難民キャンプから、アンマンの南東部にあるワハダート(新アンマン)難民キャンプ(Mukhayyam al-waḥdāt)に移ったことを聞き、まったく住所もわからなかったにもかかわらず、親戚の者たちと再会することができた。通称ハイイ・アッパースィーヤ(アッパースィーヤ地区)に村人たちが集まって住んでいたからである。

しばらくワハダート・キャンプに住み、その後同キャンプのはずれに当たる場所に自分の家をもった。ヨルダン教育省の管轄下にある中学校でアラビア語の教師として働いた。筆者が聞き取りをした時点では校長になっていた。しかし、その給与(月給約250ディーナール、当時の換算レートで約12万円に相当)だけでは5人の子供を養っていけないとのことで、夜はヨルダンの主要アラビア語日刊紙の一つで校正の仕事もしていた。筆者の帰国直前、年金受給者の資格(勤続20年以上)を得てから中学校校長を退職し、専門学校(kulliyya、いわゆるコミュニティ・カレッジ)の司書として再就職した。

以上がアブー・ムハンマドの簡単な個人史である。筆者が聞き取りを始めた段階においては知り合って2年という歳月が流れていたので相互の信頼関係はできていた。したがって、アブー・ムハンマドから比較的率直な話を聞くことができた。アラビア語の教材として使用していたパレスチナの小説(ガッサーン・カナファーニー作品集)<sup>(10)</sup>と一緒に読みながら、アブー・ムハンマドが外国人である筆者に対しての自らの記憶の中のパレスチナを語る過程で、彼自身のパレスチナのイメージが若干変化し、先鋭化したことを感じることもできた。それは、アブー・ムハンマドと同じ年に生まれたカナファーニーの作品を通じて自らの体験をより明確な形で結晶化できたからであるように思われた。彼はそれまでカナファーニーの作品を読んだことがなかったのである。しかし、彼は短編小説を読み進むにつれて時には涙することもあり、小説に触発されてフィクションと自らの体験を混同してしまうことすらも起こった。

したがって、聞き取りに関しては、聞き取りを行う側の者と話す側の者の両者間に起こる微妙な関係の変化の問題も無視できないが、それ以上に、40年近く離散の状態にあるアブー・ムハンマド自身の感じている故郷パレスチナのアップーサーヤ村の心理的距離の方が問題になってくる。なぜなら、彼の記憶の中の「村」の具体的イメージはかなり流動的で曖昧になっているからである。彼はイスラエルに親戚がいないため一度も自分の故郷を見ていない。この心理的距離の遠さを彼自身は親族(ハムーラ)や村の人々との付き合いで補填しているように思われた。

むしろ筆者がここで問題にしたいのは彼自身の中の具体的パレスチナである「村」のイメージが記憶のなかで拡大的に再生されている点である。記憶の拡大的再生こそがグルーバ ghurūba(離散した状態で周囲から疎外されている状況)という環境のもとでパレスチナ人が共通して抱いている記憶のあり方であろう。グルーバの状態でありながら故郷の「村」の家と彼を心理的に結びつける象徴的な役割を果たしているのが、家の鍵である。村から一時的に避難するときに家の戸締まりをし、鍵だけをもってきたのである。その鍵は今

でも大事に保管されているという。

彼の提案で、アンマン在住のアッバーシーヤ村の出身者が著わした委任統治時代の同村のジハードの歴史についての小冊子（ハサン・クナシュ編『パレスチナ・アッバーシーヤ村のジハード1921～1948年』<sup>(11)</sup>）をアラビア語テキストとして使用しながら、筆者が彼に質問しながら話を聞くという形式をとった。最後の数時間を除いてノートをとることもしなかったし、録音することもしなかった。しかしながら、そうすることによってアッバーシーヤ村のみならず、難民としての生活、さらには政治、そして政治に非常に強く結びついた形でのイスラムの話もかなり率直にしてくれる結果となった。

本稿においては、上記の小冊子からの情報がかなりを占めるが、この小冊子の記述については必ずしも信憑性があるわけではない。特に、この小冊子が出版された目的はアンマン在住のアッバーシーヤ村出身者に配布するためのものであるので、その性格上、アッバーシーヤ村出身者の相互間の問題を惹起したり、不愉快になるような事実はまったく書かれていないのは当然である。

### 3. アッバーシーヤ村の現在

アッバーシーヤ村は現在どうなっているのか。イスラエル建国後イエフードと改称され、パレスチナ人は一人も住んでいない。以下、かつてのアッバーシーヤ村を、地理的位置、人口、現在の状況、という3点から簡単に述べてみよう。

#### (1) 地理的位置

アッバーシーヤ村は、地中海沿岸の代表的なアラブ港湾都市であったヤーファ（現在、行政単位としてはテル・アヴィーヴーヤッフォに入る）から東へ約13kmの位置にある。南にはリッド（現ベン・グリオン）空港、北にはユダヤ人最初の入植村ペタハ・ティクヴァ（周辺に住んでいたアラブは以前そこにあっ



## (2) 人口

人口に関しては、1945年の村落調査の統計では、人口は約5800人(うちアラブ5650人、ユダヤ人150人)を擁し、人口規模ではヤーファー県のアラブ村落としてはサラマ(人口6730人)に次いで第2位であった。ちなみに、ヤーファー県全体の人口を見ると、37万3800人(うちアラブ10万9700人、ユダヤ人26万4100人)で、ユダヤ人人口のほうが多かった。それだけにシャロンと呼ばれる地中海海岸地域(アラブはサーヒリー-Sāḥilīと呼んでいた)におけるアラブ-ユダヤ人入植者の関係は興味深いものがある。

また、1945年時点でのアッパースィーヤ村における土地所有を見てみると、全面積は2万540ドゥーナム(1ドゥーナム<dūnam>=約900m<sup>2</sup>)で、うち、アラブ所有が1万7499ドゥーナム、ユダヤ人所有が1135ドゥーナム、公有地が1906ドゥーナムであった<sup>(13)</sup>。アッパースィーヤ村の土地をユダヤ人に売却したのは、ヤーファー市長も何期も務めたことがあり、委任統治期の伝統的なアラブ民族運動の指導者の一人であったウマル・バイタルであるというイスラエル研究者による研究も出版され始めている<sup>(14)</sup>。

## (3) 現在の状況

アッパースィーヤ村は現在はイエフードと呼ばれ、主にトルコからの移民ユダヤ人が居住している。イスラエルの人口統計によれば、イエフードは1948年11月8日においては人口は0であったのが、82年の12月31日には1万3000人にまで達している<sup>(15)</sup>。街並は基本的には1948年以前と変わらないが、2つあったモスクの1つは改造されて喫茶店になっているし、また、もう1つのモスクは廃墟になり、放置されたままである(写真参照)。多くの家屋は石造りのため以前からのものがそのまま使用されている。1951年には行政的には市になった。イエフードは現在は基本的にはテル・アヴィーヴのベッド・タウンではあるが、自動車、菓子などの工場もあり、周辺地域の入植地の商業センターとしての機能も果たしている<sup>(16)</sup>。



(写真) 廃墟となったアッバースィーヤ・モスクのミナレット  
(1986年 3月28日筆者撮影)



## 第2節 アッバーシーヤ村の崩壊

### 1. 1948年以前のアッバーシーヤ村

#### (1) 村名の由来と聖者信仰

アッバーシーヤ村の村名に関しては、1936年に村民がアル・ヤフーディーヤ al-Yahūdīya からアッバーシーヤに変更したという<sup>(17)</sup>。36年はアラブ大反乱におけるゼネ・ストが開始される時期であり、村名変更がこの時期と一致するのは興味深い。村名変更の理由は明確でないが、33年以降パレスチナへのユダヤ人移民が急激に増大するという危機的状況において、ユダヤ人がアラブよりも以前からこの村に住んでいたという証明に利用されかねないアル・ヤフーディーヤ（単語そのものの意味はアラビア語で「ユダヤ教」の意味）では都合が悪いという政治的判断があったと推測される。ただし、アッバーシーヤ村の北隣には最も古いユダヤ人入植地ベタハ・ティクヴァがあり、この入植地との交流もかなりあったことを考えると村名変更のもつ意味はかなり深刻なものであったといわなければならない。

旧名アル・ヤフーディーヤはアッバーシーヤ村にある聖者廟 makām にちなんだといわれ、その聖者の由来は、旧約聖書に登場し、後に神によってイスラエルと名づけられるヤコブとその妻レアの息子ユダである（創世記29章35節）という説がある<sup>(18)</sup>。しかし実際には、その名称の起源については定かではない<sup>(19)</sup>。イスラエルは建国後再びヘブライ語読みのイエフードという呼び方に戻している。しかしまた、アッバーシーヤの名称自体も、同じく村にあり、そこに埋葬されているというシャイフ・アッバースの聖者廟からとられたものであることを忘れてはならない。

村名と聖者信仰が密接に関わっていることは、パレスチナにおけるムスリムの聖者と聖地について研究したタウフィーク・カナアーンが指摘するように、この村だけに限ったことではなく、パレスチナの地名では広くにみられ

る現象である。つまり、パレスチナには旧約・新約聖書の預言者たちが生き、活動し、埋葬された場所が多くあり、預言者が生まれた場所、重要な事跡を残した場所、死後現われたとされる場所などが聖地として信仰の対象となっている。ただし聖者の名前が地名にとられたのか、その逆なのかは個々の場所によって異なっている<sup>(20)</sup>。

ところで、アッパースィーヤ村の村民はすべてシャーフィー派のムスリムである。したがって、イード・アル・フィトル (‘īd al-ḥiṭr) とイード・アル・アドハー (‘īd al-aḍḥā) のイスラムの2大祭りも盛大に行われる。この時には村全体に飾りつけがなされ、若い女性たちは新しい服で着飾り、踊りを楽しんだ。若者たちは近くのヤーファーに出かけて数日を過したという。年老いた女性らは家で食事の準備をしたり、お菓子を作り、老人たちは村の親類の家に出かけた。この祭りのときには、色模様のハンカチに包んだピスタチオ、ハシバミの実、くるみを親戚にあげる習慣があった<sup>(21)</sup>。

アッパースィーヤ村では聖者にちなんだ祭り (mawsim) も年に数回あった。聖者の祭りには、スィドナー・アリー (Sayyidnā ‘Alī) 廟 (所在地はデイル・ガッサナ <Dayr Ghassāna>), ナビー・ルービーン (al-Nabī Rūbīn) 廟 (所在地はヤーファーの南を流れるソレク川のほとり), ナビー・サーレフ (al-Nabī Ṣāliḥ) 廟 (所在地はラーマッラーの北西約15km) への参詣 (Ziyāra) がある。この時には、参詣に行って、そこで数日間過し、この時の供えたものをみんな村に持ち帰るといふ。この祭りは売買するときでもあると同時に、遊興の時でもあった。すなわち、踊りや歌や競馬が行われたのである<sup>(22)</sup>。

以上述べてきたように、村名自体が聖者信仰を媒介として政治的正統性の獲得のための手段として動員され、政治問題化する可能性をはらんでおり、アッパースィーヤ村出身の研究者による村についての次の一節は、その典型的な例であるといえよう。「シオニストは(イスラエル建国後)アッパースィーヤ村の名称、特にシャイフ・アッパース廟につながってしまう聖者廟も墓aḍriḥaもすべて破壊してしまった。そして、ウマル・ブン・アル・ハッターブ (第2代カリフ) にちなんでつけられたアブー・アルクーブ廟も、また、シャイフ・

アブドッラフマーン廟も同様であった。同時に、シオニストたちは、預言者フダー Hudā(原文のまま。村民は廟の聖者をイエフードではなく、このように呼んでいたという)廟にユダヤ教的な表現(つまり、イエフード)を刻み込んでそれを保護し、自分たちがこの村にアラブより以前から住んでいるんだと主張するために世論をたぶらかそうとして躍起になっているのである。これがシオニストたちが1948年に占領したアラブの町や村でとったやり方であり、1967年にもユダヤ化するために西岸の町や村で依然として同じことをやっているのである」<sup>(23)</sup>(括弧内は筆者)。

## (2) 村の親族構造

パレスチナの村の親族構造を議論する場合、父方単系親族集団としてのハムーラ ḥamūla(アーイラ 'ā'ila に相当)が重要な役割を果たしている。ハムーラはそれぞれの父系の出自をたどってその祖先と成員との関係を具体的に示すことのできるリネージであり、ハムーラの成員は同じハムーラに帰属しているという一族としての強い意識をもっている<sup>(24)</sup>。

ハムーラの一族は村落の一区画に集住している。ハムーラの下位集団で、同一の姓を持つ数家族(usra/fakhdh, ただしインフォーマントは āl という表現を好んで使用した)は、ホーシュ(ḥawsh)またはダツワール(dawwār)と呼ばれる中庭を囲んで一緒に住んでいる。外部に対しては閉鎖的な居住空間を形成するホーシュがパレスチナ村落の基本的な居住単位であるといえる。したがって、居住形態から見れば、家族は1つないしはそれ以上の細胞(ホーシュ)から構成され、ハムーラはその集合体としてもとらえることができる<sup>(25)</sup>。

他のアラブ諸国同様、パレスチナにおいても、ハムーラを土地の共同占取の主体として位置づけることができよう。本来、ハムーラの機能は、土地の共同占取の形態であるムシャーア al-mushā'制度に示されている土地支配と家父長支配の両側面から検討すべきであろう<sup>(26)</sup>。

しかし、ここでは資料的な制約のため、家父長支配の側面、すなわち、ハ

ムーラの長であるムフタルによる伝統に基づく一族支配と成員による家父長への服従から考えてみたい。「はじめに」で述べたようにハムーラをパレスチナ社会の家父長制として性格づけるとしても、ムシャア制は解体し、ハムーラの経済的基盤がなくなってからも、ハムーラが現在に至るまでなお維持・再生産され、機能し続けているのかという問題を、家父長の権力の源泉を伝統からのみ説明するのでは解明できない。この解明の鍵はイスラエルの研究者ガブリエル・ベアーの論文<sup>(27)</sup>の説明に見いだせる。

ベアーは、ハムーラが行政的に支配機構に組み込まれるのは1864年オスマン法においてである（この法は実質的には1944年村落行政法施行まで強制力をもった）とする。この法により、ムフタル職が設置された。ムフタルは通常、ハムーラの長である。したがって、ハムーラの数・規模により一村落到ムフタルが複数いることもありえた。ムフタルの主要な職務は村の治安維持であり、村落での不審者の警察への通報者としての機能をもった。この機能はオスマン期、イギリス委任統治期、ヨルダンによる西岸支配期を通じて基本的には変わらなかった。ただし、委任統治以降の大きな変化としては、ムフタルは徴税請負の権限を奪い取られたことである。さらに、ヨルダンによる西岸支配期においては、ムフタルは村落防衛の名目により設立された特別警察への村人の動員と財政負担の責任を政府より命令された。つまり、ムフタルは行政機構の末端としての機能をも有していたのである。

ところで、アッパースィーヤ村におけるハムーラは次の5つに分けることができ、村人に語り継がれているハムーラの起源を簡単に説明すると次のようになる<sup>(28)</sup>。

① アル・バターンジャ al-Baṭānija：アラビア半島のタミーム部族に属しており、オスマン時代にこの村にきた。親族はヤーズール、ナハフ、ナーブルス、ヘブロン、カラクにもいる。同ハムーラを構成するのは24家(fakhdh)からなる。

② アル・マナースラ al-Manāṣura：ミクダード・ブン・アスワド・アル・ドゥーリー（不明）に遡ることができる。もともとラーマッラー近くのディブ

ワーン村に住んでいたが、その後この村に移り住んだ。同ハムーラを構成するのは19家である。

③ アル・ダラーリシャ al-Dalālīsha：祖先はアッカー近くのナハフ村の出身であった。このハムーラが最初にこの村に住み着いたといわれている。同ハムーラを構成するのは11家である。

④ アル・マサールワ al-Maṣāruwa：名称から判断できるように、祖先は16世紀にエジプトから移民してきたといわれている。最も遅くこの村に来たハムーラである。同ハムーラを構成するのは18家である。

⑤ アル・フメイダート al-Ḥumaydāt：バフリー・マムルーク朝スルタン・バイバルス1世(1269～77年在位)の末裔という言い伝えがある。ダラーリシャとどちらが古くからこの村に住んでいるか定かではないが、ダラーリシャのほうが古いという村の長老のほうが多いという。同ハムーラを構成するのは10家である。

この5つのハムーラのうち、ダラーリシャとフメイダートの2つのハムーラが最初にこの場所に住み着いたといわれ、泉のある中心部(nawāt al-qarya)を形成し、その周囲に他のハムーラが後に住み着いていった。筆者のインフォーマントであったアブー・ムハンマドはパターンジャ・ハムーラ出身であり、数としてはこのハムーラが最大であるとのことであった。したがって、ムフタルの中でも、このハムーラ出身のムフタルは影響力を行使しえた。しかしハムーラをめぐる相互関係に関しては、時としてパレスチナ全体の派閥の抗争がハムーラ間の抗争に反映されることもあった。たとえば、委任統治期における派閥の抗争はイスラム高等評議会に拠点を置くフサイニー派とその反対派のナシャーシービー派の間のものが最も深刻なものであった<sup>(29)</sup>。

### (3) 村の経済生活

アッバースィーヤ村は、地中海に面した海岸平野の中心部にあった。したがって、ヤーファアに近いという地理的な条件のため、ヨーロッパとの接触がきわめて早い時期から行われていたという点から、パレスチナにおいても

先進地域であったということができよう。ヤーファール港はヨーロッパからのキリスト教徒の聖地巡礼の入口にあたり、エルサレムの外港として機能していた。アッパースィーヤ村はエルサレムへの街道沿いにあり、また、鉄道の路線の脇にも位置していた<sup>(30)</sup>。

アッパースィーヤ村は農業が中心であった。特に果樹園での柑橘類の栽培は盛んで、かなりの量を商品として出荷したといわれるが、これにより農業における資本主義的な生産様式が早くから浸透していたと考えることができる。

村の農民は多くは零細の自営農であり、商品作物を栽培するのは農家一部の富農だけであった。そのため、農業だけでは十分に生活できない農家もあり、農業労働者として周辺の果樹園に働きに行くものもあった。たとえば、村民のなかには村の近くのウィルヘルマー・ドイツ果樹園(bayyarāt al-Alman)と呼ばれる場所(ドイツ系プロテスタント・テンプル協会が19世紀後半に設立した入植地のひとつ)に住み込んで働いているものもいたし、ユダヤ人の果樹園で働くものもいた。

生産力の面から見れば、井戸を掘る技術がもたらされるまで、村の水資源は泉のみであり、灌漑も畜力によるものであった。村には泉が2つあった。マリーハ泉(Bi'r al-Māliḥa)は村の西にあり、ナツメヤシの木(nakhīl)に囲まれていた。イスラエル占領後は公園になった。もう1つはフスル泉(Bi'r al-Ḥuṣr)であり、村の東にあった。この泉は尿閉(ḥuṣr fī al-būl)に効用のある薬として飲用したためにこの名前がついたという。この泉はイスラエル占領後破壊されたという。井戸に関しては、柑橘類栽培の拡大とともに、1948年までに150の井戸が掘られた<sup>(31)</sup>。

また、アッパースィーヤ村では、ござ(ḥaṣīr)と麻なわ(khayt al-qunnab)の生産が行われていた。ござはパレスチナではバルビール(barbīr)と呼ばれ、その原材料はフーレ湖(パレスチナ北部)周辺の湿原に生えている植物から作っており、麻なわの原材料はインドから輸入していた。この2つの製品はパレスチナ全域のみならず、シリア・レバノンまで出荷していた。ござに

関しては、村出身のシャイフ・マフムード・イスマイルがヤーファーに同業者のなかでは最大の店舗をもっていた。

交易という点から見ると、それぞれの農家は平均して1頭から2頭の乳牛を飼育しており、毎朝牛乳を集荷場に集め、ヤーファーなどに出荷していた。また、アッパースィーヤ村では、毎週土曜日(sūq al-sabt)が行われ、牛や馬が売買されたほか、パレスチナ全域からあらゆるものが集まった。この市はソッダの月曜日(sūq al-ithnayn)と同様のものであった<sup>(32)</sup>。

#### (4) 周辺の入植者ユダヤ人との関係

アッパースィーヤ村とユダヤ人入植地との関係を考える場合には、地理的に近いペタハ・ティクヴァとの関係を避けて通ることができない。イスラエル建国以前のアラブと入植者ユダヤ人の相互関係を考える場合、建国後の両者の対立状況を投影して、常に敵対的な関係であったと判断することがあってはならない。残念ながら、資料が不足しているために、日常生活のレベルにおけるアラブーユダヤ人関係をさまざまな角度から検討することは難しいが、断片的な情報を組み合わせるだけでも、我々が想像する以上に両者は強い結びつきをもっており、友好的な関係にあったと推測することができるのである。これは筆者のインフォーマントも強調していたことであるし、また、ペタハ・ティクヴァと隣接するアラブ村落サルマの住民へのインタビューによって構成した記録(ビールゼート大学資料研究センター編『破壊されたパレスチナ村落シリーズ』第3号)<sup>(33)</sup>からも確認できる事実である。

ペタハ・ティクヴァはヤルコン川沿いのアラブ村落ムラッピス(Mulabbis)の土地をエルサレムのユダヤ人が1878年購入したことに起源をもつ。現在「モシャヴァーの母」と呼ばれ、モシャヴァー<sup>(34)</sup>が最初に築かれた場所として知られている。しかし、ユダヤ人入植者は1882年頃に「衛生状態に耐えられなくなり、南に隣接するアラブの村落イエフードに移動せざるをえなくなった」<sup>(35)</sup>。これがアッパースィーヤ村とペタハ・ティクヴァ最初の接触であると思われる。

1883年ビルー<sup>(36)</sup>のユダヤ人グループが入植し、その後モシャヴァーはロシア CHILD からの資金の援助を受けて拡大していった。さらに、第2波ユダヤ人移民(1904年頃から開始)以降は、モシャヴァーはユダヤ人労働運動の拠点となった。当時のユダヤ人労働運動の中では例外的にアラブ労働者との共闘を唱えたポアレイ・ツィヨンの急進的左派であった「ロストフ派」は、ペタハ・ティクヴァのユダヤ人果樹園で働くヤフーディーヤ村(すなわちアッパースィーヤ村)のアラブ労働者による史上初の賃上げ要求のストライキを計画したが、ユダヤ人指導部とオスマン政府の協力によって流産してしまったという。ストライキに参加しようとしたイエフド村のアラブ労働者は警察で過酷な拷問を受けたが、ストライキを組織しようとしたユダヤ人指導者の氏名を自白せず、ユダヤ人の仲間を裏切ることがなかった<sup>(37)</sup>。

以上のことから判断できるように、アッパースィーヤ(ヤフーディーヤ)村の村民たちは1947年に国連分割決議が出され、アラブーユダヤ人の間で武力衝突が生ずる直前まで(ただし、1936～39年のアラブ大反乱中は中断)、ペタハ・ティクヴァのユダヤ人果樹園で働いていたことは明らかである。

ペタハ・ティクヴァに住むユダヤ人はアッパースィーヤ村の土曜市に買い物にやって来たり、アッパースィーヤ村の農家の主婦は栽培した野菜や果物をペタハ・ティクヴァに売りに出かけた。また、村民がペタハ・ティクヴァに出かけて、ユダヤ人医師に病気を見てもらおうということは頻繁であった。

アッパースィーヤ村ではその事例を聞くことはできなかったが、サラマにはペタハ・ティクヴァに住むユダヤ教徒女性と結婚したムスリム男性の例がある。その女性はまだ生存しているとのことで、イスラム教に改宗し、子供たちはパレスチナ・アラブとして生きているとのことである。ただし、この女性は欧米出身のユダヤ人ではなく、イエメン系ユダヤ教徒であると考えられる<sup>(38)</sup>。



## 2. パレスチナ人の抵抗と1948年戦争

前述のように、アッパースィーヤ村におけるハムーラの経済的な機能はその基盤を喪失したと考えることができるが、このことによってハムーラの社会的・政治的動員機能までもが失われたわけではなかった。むしろ、ハムーラの機能が社会的・政治的に強化されるのは、前述したようにハムーラが行政機構の一端として機能していたが故に中央権力が有名無実化する危機においてである。村民にとっての具体的な危機とはシオニズムによって村そのものを奪われてしまうのではないかという脅威であった。

アッパースィーヤ村にユダヤ人への反感が明確な形で現われてきたのは村名をヤフーディーヤからアッパースィーヤに変更した頃(1930年代中頃)からだと思われる。この時期にはすでにナチスの迫害を逃れたユダヤ人が大量にパレスチナに流入しており、したがって、パレスチナ・アラブの間でも危機感が高まっていたのである。1936～39年のアラブ大反乱はアラブとユダヤ人の関係を大きく変えることになったが、先にも触れたように、両者の関係が完全に途絶えたわけではなかった。

しかし、1947年11月29日の国連パレスチナ分割決議(総会決議181号)は両者の関係を急激に悪化させた。イギリス政府はパレスチナ委任統治の放棄をすでに発表してしまっており、このような無政府状態に近い状況に対応して、アッパースィーヤ村民もシオニストとの戦闘に備えてあらゆる種類の武器を購入する努力を行った。そのため、パレスチナ中部西地区司令官であるシャイフ・ハサン・サラーマ(al-Shaykh Ḥasan Salāma)<sup>(39)</sup>が同村をパレスチナ中部西地区における兵站基地にした。このようにアッパースィーヤ村民はパレスチナ中部西地区司令官であるサラーマの指揮下で闘ったのである。

アッパースィーヤ村内部での対応も当然、ハムーラを軸に行われた。すなわち、村の長老・名士はアッパースィーヤ民族委員会(lajna qawmīya)を結成した。民族委員会は13名のメンバーから構成されていたが、その構成は当

時の村のハムーラの構造を反映するものであった。そのうち5名はそれぞれアッパースィーヤ村の5つのハムーラの代表(ムフタール)であり、残り8名が委員で、村の有力者(ワジーフ wajih)から構成されていた。民族委員会委員長は、村会議長(rā'is al-majlis)で、村最大のハムーラであるパターンジャのムフタールであるザキー・ムハンマド・アブドゥッラヒームであった。有力者に関しては、パターンジャ・ハムーラから3名、マナーズラ・ハムーラから2名、残りのダラーリシャ、マサールワ、フメイダート各ハムーラから1名ずつ出たのであった<sup>(40)</sup>。すなわち、ハムーラの規模に対応した構成であった。

さらに、アッパースィーヤ村では、ハサン・サラーマと協力して、武器格納と周辺村落への配給を管轄する軍事問題委員会(lajna li-l-shu'ūn al-'askariya)も結成され、戦闘員も周辺村落に派遣した。この軍事問題委員会は次の3名から構成された。ザキー・アブドゥッラヒーム(パターンジャ)、マフムード・ダルウィーシュ(フメイダート)、ムハンマド・アブドゥルハミード(マナーズラ)であった(括弧内はハムーラ名)<sup>(41)</sup>。

ところで、参戦したアラブ諸国から見た1948年戦争の記述では、戦闘が「内戦」から「国際化」する、アラブ諸国軍によるパレスチナ進軍の開始日1948年5月15日が分水嶺になろうが、村ないしは地域レベルでの戦闘では若干様相を異にする。なぜなら、シオニストによるダーレト計画、すなわち、軍事行動によるユダヤ人国家のための領域確保が国連分割決議後着々と進められていたからである<sup>(42)</sup>。つまり、アラブ諸国がパレスチナに進軍する以前の段階において、分割決議で「ユダヤ人国家」に指定された地域、そしてそれ以外の地域でも軍事的行動を行い、その地域の制圧を行っていたのである。

アッパースィーヤ村の村人たちの記憶に従えば、シオニストによる村自体の占領とその奪還、さらに再占領を基準として区分するのが最も適切ではないかと思われる<sup>(43)</sup>。したがって、ここでは3つの時期に分けることができよう。第1期は、国連パレスチナ分割決議(1947年11月29日)から始まり村民の村からの避難まで、第2期は、ユダヤ人によるアッパースィーヤ村の占領(1948

年5月5日)から第1次停戦(1948年6月11日)まで、第3期は、アッパースィーヤ村の奪還(1948年6月11日)からユダヤ人による同村の再占領(1948年7月5日)までである(年表参照)。

1948～49年「パレスチナ戦争」においては確かに、エジプト・ヨルダンを中心とするアラブ諸国軍とユダヤ軍との戦闘は正式に休戦協定が締結されるまで続くが、パレスチナ人にとっての戦争はそれ以前に結着がついていた。戦闘に加わった成年男子を除いて、老人・婦女子たちは一時的に「避難」するために1948年4月15日に村を離れた。そのため、パレスチナ戦争が始まった時にはすでにパレスチナ人の運命はあらかじめ決まっていたといえよう。つまり、ここでの時期区分の第1期ですべてが決せられたのであった。パレスチナ人たちは自分たちの抵抗(ジハード)に触れる時にはアラブ諸国正規軍の軍事行動についてまったく語っていないことが多いからである。

第1期における村の戦闘員とユダヤ人との比較的規模の大きい戦闘は次のものがあった。まず第1が、1947年12月13日の戦闘である。その前日、アッパースィーヤ村戦闘員が英軍に護衛されているユダヤ守備隊をウィルヘルマー・ドイツ果樹園で攻撃し、リッド空港まで追い詰めたが、今度は英軍との戦闘になった。戦闘を重く見たリッド空港英軍司令官は同村に隠されている武器捜査を命じたので、同村戦闘員は果樹園に身を隠したが、英軍は現われなかった。翌土曜日の午後、土曜日が終わった頃英軍を装ったユダヤ人兵士たちが捜査と称して現われたが、偶然村人の一人が兵士を知っていたため、偽装が発覚し、激しい戦闘になり、双方ともかなりの死傷者を出した。

第2が、1948年1月2日の戦闘である。この時期はオレンジの収穫期にあっていたため、アッパースィーヤ村でも果樹園で働く労働者を守るために自衛団を作っていた。同日、村の北にあるハサン・ザーヒル所有の果樹園にベタハ・ティクヴァ方面からユダヤ人部隊が攻撃を行ってきた。当日、偶然村にいたハサン・サラーム司令官が戦闘場所に駆けつけたが、戦闘は8時間近く続いた。結局、アッパースィーヤ村戦闘員の勝利であったという。これ以降5月5日に占領されるまで同村への攻撃はなかった。

2つの戦闘の後、アッパースィーヤ村が占領されるまでの期間に、2つの重大な事件が起こった。まず、ハサン・サラマ指揮下のパレスチナ中部西地区司令部の建物が1948年4月5日英軍によって爆破されたことである。この爆破によってアッパースィーヤ村出身の者も6名死亡した。この司令部はラムラとリッダの両市を防衛するのに適当な位置にあった。この爆破によってサラマ司令官はアッパースィーヤ村を兵站、補給、作戦のための司令部とした。

第2は、戦略的に重要な地点にあるテル・リトヴィンスキー基地(mu'askar Tall Litwinski)が1948年4月15日にユダヤ人側の手に落ちたことである。この基地は第2次世界大戦中アメリカ軍が中東の軍事拠点として築いたものであったが、戦後英軍がこの基地を管理していた。したがって、アラブはこの基地をアメリカ基地(mu'askar al-Amrikān)と呼んでいた。この基地は、東のアッパースィーヤ村と西のサラマ村というアラブ側の拠点を北から分断する重要な戦略的な位置にあった。そのため、この基地の陥落以降、サラマ村へ通じる道をほとんど封鎖された状態となり、テル・リトヴィンスキー基地の南側に東西に並ぶ村、すなわち、アッパースィーヤ、クフル・アーナ、サーキヤ、ハイリーヤは直接ユダヤ人部隊の軍事的脅威にさらされることになり、その住民たちは4月15日以降東側の村々、すなわち、ベイト・ナバーラ、デイル・タリーフ、ランティーヤなどに避難し始めたのである。忘れてはならないことは、村民が避難する5日前の4月10日、デイル・ヤースィーン村の大虐殺がすでに起こっているということである。インフォーマントのアブー・ムハンマド一家も父親を除いた家族全員でとるものもとらずに村を離れたという。そして、近くの村の親戚の家を頼りに避難したのである。

4月25日には、アッパースィーヤを除くテル・リトヴィンスキー基地の南に東西に並ぶ村々は陥落し、28日にはアッパースィーヤ村の北東にあるランティーヤも占領されたため、アッパースィーヤ村はユダヤ人支配地域に西に向かって突き出る形で残ったのである。5月5日、ユダヤ人部隊がアッパースィーヤ村を攻撃してきたが、状況が明らかに異なっていた。なぜなら、そ

れまではなかった自動小銃と戦車が使われたため、アッパースィーヤ村戦闘員たちの掘った塹壕は突破され、アッパースィーヤ村は占領されてしまったのである。

第2期、第3期については簡単に記すに留めておきたい。アッパースィーヤ村の村民たちは東のデイル・タリーフ、ティーラなどに避難していた。1948年5月15日、パレスチナ戦争が始まって、アラブ諸国とユダヤ軍との戦闘が始まった。国連安保理の停戦決議にしたがって、ベルナドット国連調停官<sup>(44)</sup>が6月7日に、11日金曜日午前10時をもって4週間の停戦が発効すると発表した。これを機に、アッパースィーヤ村軍事問題委員会メンバーを中心に村奪還の計画をたて、11日午前零時半に200名の戦闘員をもって攻撃を行う決定をした。そして、奪還に成功したのであった<sup>(45)</sup>。

村奪還後、270名の戦闘員が村の守備にあたったが、一般の村人がいないため、少数では防衛は困難であった。そこで、村に最も近いところまで進軍してきているイラク軍、ヨルダン軍に援助を求めたが、アッパースィーヤ村は国連分割案のユダヤ人国家領域に9キロ食い込んだところにあるとして拒否された<sup>(46)</sup>。つまり、それは停戦期間が終れば村は孤立化するということを意味した。徹底抗戦か、撤退かの二者択一しかなかった。ユダヤ人は第1次停戦期間中、新たに武器を確保し、軍事作戦(ラムラ、リッダ地域はダニー作戦と呼ばれた)を展開した。結局、アッパースィーヤ村軍事委員会は村防衛のため徹底抗戦を選択し、100名近くが残り、対抗したが、停戦期間終了前の7月5日、同村は再びユダヤ人の手に落ちた。この戦闘で31名が戦死したという。

#### アッパースィーヤ村のジハード年表

##### 〔第1期〕

1947年

11月29日 国連パレスチナ分割決議

12月13日 ユダヤ人兵偽装事件に伴う戦闘

1948年

- 1月2日 オレンジ果樹園襲撃に伴う戦闘(ハサン・サラーマの活躍)
- 4月5日 パレスチナ中部西方面司令部爆破に伴うアッパースィーヤ村への司令部移転
- 4月10日 デイル・ヤースィーン村虐殺事件
- 4月15日 ユダヤ人部隊によるテル・リトヴィンスキー基地の占領に伴って、アッパースィーヤ村村民の避難開始
- 4月25～28日 アッパースィーヤ村周辺村落の陥落に伴う同村の軍事的孤立化
- 5月5日 ユダヤ人部隊によるアッパースィーヤ村の最初の占領

### 〔第2期〕

- 5月14日 イギリス委任統治終了、イスラエル国家独立宣言
- 5月15日 アラブ諸国軍、パレスチナへ派兵(パレスチナ戦争開始)
- 6月1日 ハサン・サラーマ戦死
- 6月7日 フォルケ・ベルナドッテ国連調停官、6月11日午前10時から4週間の第1次停戦(7月9日まで)が発効することを発表

### 〔第3期〕

- 6月11日 アッパースィーヤ村軍事委員会、午前零時半、同村奪還のための軍事行動、アッパースィーヤ村の奪還成功
- 7月5日 アッパースィーヤ村、最終的陥落
- 7月18日 第2次停戦発効

### 1949年

- 2月24日 イスラエル、対エジプト休戦協定締結
- 3月23日 イスラエル、対レバノン休戦協定締結
- 4月3日 イスラエル、対ヨルダン停戦協定締結
- 7月20日 イスラエル、対シリア休戦協定締結

### 第3節 アッバーシーヤ村の「復活」

#### 1. パレスチナ人社会崩壊がもたらした諸影響

1948年のパレスチナ人社会の大崩壊(パレスチナ人はこれを「ナクバ al-Nakba」と呼んでいる)は土地を失うという悲劇を意味するだけではなく、パレスチナ人の生活様式そのものを規定していた社会経済的諸側面での大変動であったということは言うまでもないことである。そればかりではなく、大崩壊は個人的レベルにおけるパレスチナ人の新たな行動様式と意識を形成することになった。

ナクバがもたらした社会経済的な影響は、第1は、パレスチナ人社会構造そのものの崩壊 (taḥaṭṭum) であり、第2は、パレスチナ人の離散 (shatāt) である。

第1に関しては、1948年にパレスチナ人社会の物質的基盤が突然破壊されてしまったことを意味する。この物質的基盤、すなわち、社会の下部構造(最も重要な生産手段である土地を失い、そして、それまでの生産諸関係や生活様式を含む)が崩壊してしまったため、新しい状況では、以前のようにパレスチナ人、特に農民は、土地を基本としながら相互に結びつく生活に復帰することは不可能になったのである。

第2に関しては、パレスチナ人のほとんどはその土地から追い出され(パレスチナ人はこの「追放」を「根こそぎ抜き取ってしまう」という意のアラビア語の動詞(iqtala')を使う)、周辺のアラブ諸国に離散した。もちろん、離散したパレスチナ人の置かれた状況はそれぞれ離散した場所によって異なっていた。ただし、ほとんどのパレスチナ人はアラブ諸国の都市もしくはその周辺部のキャンプ (mukhayyamāt) に居住した。キャンプでの居住がパレスチナ人の生活の新しい生活形態であったといえるのである。

ところで、パレスチナ人のなかには土地を離れなかった人々もいることを

忘れてはならない。離散パレスチナ人を除くと、次のパレスチナ人がその例である。まず、1948年戦争におけるイスラエル支配下の地域に残ったパレスチナ人である。彼らはイスラエル市民権は与えられたが、イスラエル内では差別的な扱いを受けた<sup>(47)</sup>。次に、ヨルダン川西岸とガザのパレスチナ人である。1948年戦争後もヨルダン川西岸に居住し続けたパレスチナ人は、ヨルダン川西岸やヨルダン川東岸（ヨルダン・ハースム王国）に離散し、その難民キャンプに居住するパレスチナ人と同様に、ヨルダン国籍が与えられた。一方、ガザは1948年戦争でエジプト支配下に入ったものの、土地の大部分をイスラエルに占領されたため、経済的基盤をなくしてしまった。また、北と東はイスラエルに取り囲まれ、南はエジプトの軍事地域に指定されたシナイ半島に隣接していたので、ガザは実質的には孤立化してしまった。その上、狭い地域に非常に多数のパレスチナ難民が流入したので、生活はきわめてきびしかった。したがって、ガザの住民はUNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）とエジプト政府の提供する基本的な生活物資によってその生命を支えていたといえるのである<sup>(48)</sup>。

離散パレスチナ人社会は、統合された社会であるとは言えなかった。パレスチナ人はアラブ諸国の社会の周辺部で生活し、完全な市民権を与えられたヨルダンにおいてさえもやはり疎外感を感じていたのである<sup>(49)</sup>。これは次のように説明できよう。すなわち、物質的基盤の突然の崩壊が、現実の生活環境と、意識のあり方（考え方、慣習、価値観などの精神的領域）との間に非常に深い亀裂をもたらすことになり、精神および思考のレベルにおける安定が失われ、個々人のなかで激しい葛藤が生じた。つまり、古い価値観や思考法では新しい生活環境を把握することすらできなくなってしまったのである。たとえば、家父長であった父親は、自分が失業したため妻や子供が外に働きに出かけざるをえない状況を黙認せざるをえないとか、息子が家父長である自分とは別の世帯を持つだとか、農業以外の、まったく経験のない職業に就かざるをえないとかの新しい状況に、不承不承適応せざるをえなくなったのである。このようにハムーラに象徴される家父長制は実際にはその現実的な



基盤を失ってしまったのである。

このような状況における葛藤は新たな行動様式を顕在化させることになった。それは外面的には言説と行動の矛盾という表現をとることになった。すなわち、自分では現実の環境を物質的必要性からすでに「正当化」してしまったにもかかわらず、古い価値観に照らせばそのような現実を受け入れることができるはずはなく、実際の行動をまったく違う規範を持ち出して説明することになるのである<sup>(50)</sup>。

他方、新しい状況、特にキャンプでの生活は、物質的にも精神的にも痛烈な打撃となった。キャンプでの悲惨な状況から抜け出すためには、何よりも優先すべきであり、そして最も重要な目標であったはずの「パレスチナへの帰還」を日々の生活のために犠牲にせざるをえなかった。しかし、UNRW Aから食糧を与えてもらうために列を作って待つことは苦々しいことであつたし、食糧不足のため子供たちが元気をなくしていくのを見ることはなお大きな精神的な苦痛であつた。

アラブ諸国は、パレスチナの大義(アラビア語の「パレスチナ問題(al-qaḍīya al-filasṭīniya)」とは実際にこの意味であり、パレスチナへの帰還こそが大義であつた)を持ち出し、パレスチナ人を政治的にしか扱わないので、むしろパレスチナ人は自分たちが無権利状態である(dūnīya)という気持を強めることになった。パレスチナ人は周囲に対する疎外(ightirāb)を感じ、このような感情がパレスチナ人をホスト国であるアラブ社会に「同化」(indimāj)させるのを阻むことになった。

パレスチナ人にとって、真の「救済」(khalāṣ)とは日々の生活の状態を改善するなどということではなく、自分たちの存在の悲惨なありようを救済するものでなければならなかった。だからこそ、パレスチナ人は自分たちのホスト国での定住計画を拒否し、パレスチナ人としての帰属(intimā')を主張したし、たとえ名目的な目標であってもパレスチナへの帰還にこだわり続けたのである。

しかし、パレスチナ人を取り巻く悲惨な生活の環境、シオニストがパレス

チナにおいて現実に着々と進めている国家建設などを考えると、パレスチナ人たちは自分たちの目標を実現するのは非常に困難だと結論せざるをえなかった。したがって、パレスチナ人の間にどうにもならない挫折感 (ihbāt) が生れたのであった。

要約すれば、パレスチナ人は、一方で悲惨な現実からの救済を求めながら、他方で挫折を感じるという二者のはざまで、換言すると、一方で一条の光であろうとも帰還に向かって突っ走る、押え切れない熱情と、他方で現実を冷静に見つめ、内省的ですらある状態の間の心理的な葛藤が、パレスチナ人の行動様式に抑圧された形で表われることになったのである<sup>(51)</sup>。

## 2. パレスチナ人難民キャンプの特質

1948年後のパレスチナ人社会の構造上の特殊性を、社会的動員が行われる社会的・地理的統合単位としての難民キャンプに関して検討してみたい。

難民キャンプは、前述のように、1948年後に形成されたパレスチナ人社会の新しい生活形態であり、統合単位であった。つまり、パレスチナ難民の現実から生み出された生活形態が、都市と農村の中間的な居住形態であるキャンプであった。したがって、多くのパレスチナ人にとって社会的諸関係はキャンプの枠組みの中で形成されたのである。キャンプには少なくともパレスチナ人難民全体の半数が居住しているし、難民の残りの大部分もキャンプ周辺部に居住している<sup>(52)</sup>。したがって、キャンプ内の難民間の強い結びつきは親族関係と隣人関係に支えられているが、パレスチナ人難民の社会的諸関係の枠組みはキャンプの地理的な境界を越えたネットワークをも持っているといえる。

それでは、キャンプ社会は何によって特徴づけられるか。それは、何よりも、キャンプに居住している大部分はパレスチナ農村出身の農民であったという点にある。キャンプには複数の村の出身者が、非常に狭い、衛生状態の悪い地域に密集して居住しているのである。したがって、キャンプは特殊な

社会経済構造をもっている。キャンプは、都市とも、農村とも、ましてやスラム al-ḥayy al-faqīr と呼べない。また、キャンプ居住者には社会的な格差は存在しない。つまり地主も資本家もおらず、貧困という点では均質的である。なぜなら、難民は金を稼げばキャンプを離れるからである。事務員や販売員など相対的に裕福な人と他のキャンプ住民との格差もさほどではなく、相互に矛盾を生じるほどのこともない。

また、経済的な機会もきわめて限定されている。別の側面から言うと、キャンプの土地は宅地のみである。つまり、キャンプには生産手段が欠如しているのである。たとえ資本が蓄積されたとしてもキャンプでは生産に投下することができない。したがって、キャンプでの生産活動の場はパン屋などの小商店、職人の仕事場(ブリキ職 samkara, 大工 najjāra, 仕立て屋 khayyāta)などに限定されている。

キャンプを都市と農村に比較してみると、農村では人口が少なく、村民の多くは農業に従事しており、社会的諸関係も直接的・個人的なもの(第一次集団としての特徴をもつ)であるが、都市はその逆である。ところが、キャンプは人口面では都市と農村の中間にあるが、都市と同様、住民構成や共通の利益が狭い地域に限られていることを考えると個人間の面識が広がることはなく、キャンプ内の相互関係は直接的・個人的なものにはなるはずはない。しかし、狭い面積のキャンプ内には、ハムーラの(ḥamūla- 'ā'iliya)・農村的(qarawīya)な諸集団が社会単位として機能しているため、直接的・個人的な諸関係が依然として続いているし、社会意識の面でもそのような関係が投影されていると考えられる。

キャンプは形態的には都市の枠組みには入らないが、その住民はパレスチナ人という民族的特殊性(al-khaṣā'iṣ al-waṭanīya)のもとに結集しているという意味では、間接的および非人格的な相互作用によって特殊な関心を満たすための、都市における第二次集団と似たような集団を形成しているといえる。しかし、キャンプのハムーラ的な特殊な構造のため、社会的な圧力が強力で、犯罪などの発生の可能性は少なく、発生した場合も公権

力の介入を待たずすぐに解決してしまうという側面ももっている<sup>(53)</sup>。

キャンプにおける社会的諸関係のハムーラの的な性格に代表される古い社会的諸関係は根本的に挑戦されておらず、新たな社会的諸関係はキャンプには生れていないといえる。キャンプにおけるパレスチナ人社会は、1948年以後、古い社会的諸関係に根源的な変化をもたらすような内発的な発展を経験していないのである。つまり、土地を基軸とする経済的な基盤は崩壊したものの、離散によってハムーラを中心とする古い社会的諸関係は外的な要因により新たな秩序の方向性をもちえなかった。これは前節でペアーの議論を紹介した際に指摘したように、次のように考えられるのではなからうか。すなわち、キャンプ住民は自分たちの手で自分たちを組織する権限をもっておらず、外部権力、すなわち、ホスト国(アラブ諸国)の政治権力に従属している。ここに、現実の経済的な基盤を失ったハムーラやハムーラの長であるムフタールが、行政的なレヴェルでホスト国の政治権力によって活用される契機がある。換言すれば、ハムーラは上からの支配装置としての機能をもつため、キャンプ内において温存され、拡大再生産されてきたという側面も見逃すことはできないのである。

パレスチナ人の側から言えば、自らの手による政治的な組織化こそが、ハムーラの・村的な枠組みから新たな集団的な枠組みに変える唯一の方法なのであろう。しかし、キャンプ内の政党活動は一部の知識人による思想的・理論的なレヴェルにとどまったといえる。一方、ハムーラは個人を社会的に保護するものであり続けた。実際、パレスチナ革命(武装闘争)において起こったことは、ハムーラの・村的な諸集団が抵抗組織に変わったのであり、キャンプにおいて、なんらかの社会集団に所属することは、ある程度まで古いハムーラのなものに支配されていたことを意味する、とパレスチナ人研究者自身が批判的に分析しているのである<sup>(54)</sup>。

以上の指摘はレバノン難民キャンプを事例に研究したパレスチナ人社会学者も同意するところである。彼の議論によれば、キャンプ内の社会的結束(taḍāmūn)は、次のような共通の絆(urwa)に求めることができる。すな

わち、①ほとんどのキャンプ住民はパレスチナの同じ地域出身であり、その地域の村落間の強い社会的・個人的結束を継承している。②土地から根こそぎ切り離されたパレスチナ人社会は全体として抑圧されていると感じている。③パレスチナ人社会の運命は一体であると強く感じている。④パレスチナ人社会全体が同じ問題に直面している。⑤パレスチナ人社会全体が祖国への帰還という共通の希望をもって生活している。⑥パレスチナ人社会全体が共通の敵に直面していると感じている。

また、キャンプでは、ハムーラ（ただし、社会学者シルハーンは論文ではアーイラという用語を使用しているが、ここでは「家族」の訳語をあてる）の結束を弱めるのではなく、かえって強めるような絆が存在する。すなわち、①家族の成員は相互に助けあい、相互の状況を心配し、自分の意志と一緒に暮そうとする。②家族愛があらゆる種類の親愛の情（wala）よりも優先されているが、時によってはパレスチナの解放（thawra）の方が優先される場合もある。③個人は自分の生活は家族との生活の一部だと感じており、家族という枠がなくなるとさみしく感じ、愛が奪われたように感じている。④家族の成員は自分の収入は家族共通の収入であると感じており、家族の収入は共有するものと確信している<sup>(55)</sup>。

### 3. 「アッパースィーヤ村民協会」の設立

前項において1948年後のパレスチナ難民キャンプの特質を検討した。そして、キャンプがパレスチナ難民の社会的諸関係の基礎になっていること、およびハムーラと村がキャンプにおける社会集団として機能していることを示した。

以上を前提として、「アッパースィーヤ村民協会」(Rābiṭat Ahālī al-‘Abbāsīya)（以下、協会と略記）の組織・運営に関して、ハムーラがどのような役割を果たしているか若干考察してみたい<sup>(56)</sup>。

このようなパレスチナ人の相互扶助のための同郷組織である協会(アラビア

語では Jam'iya, Rābiṭa という用語を使用する)の設立は、アッパースィーヤ村に限らず、パレスチナの他の都市、村、地域の単位でもみられることである。筆者は具体的な統計を持っていないが、ヨルダンのアンマン市内だけでもかなりの数に上ると思われる。特に、1948年および1967年の二度にわたってヨルダんに流入したパレスチナ中部・南部およびヨルダン川西岸出身パレスチナ人による同郷組織はワハダート難民キャンプ(1955年設立、アンマン市の南東、面積488ドゥーナム、登録難民数1984年現在3万5166人)やジャバル・フセイン難民キャンプ(1952年設立、アンマン市の北西、面積367ドゥーナム、登録難民数1984年現在2万6118人)およびその周辺などに事務所を持っている。残念ながら、パレスチナ出身者のそれぞれの同郷組織の設立の動機・時期・規模・運営の方法などを比較するための資料を持ちあわせていないので、以下においてはアッパースィーヤ村に関してのみ触れることにする。

1979年、アッパースィーヤ村民協会設立の準備を行うための設立委員会が結成された。この設立委員会の構成メンバーに関して興味深い点は、メンバーが旧アッパースィーヤ村の5ハムーラからの2名ずつ、計10名で構成されていることである。この設立委員会が設立総会を行い、最初の運営委員会(al-hay'a al-idāriya)委員選出のための選挙を行った。運営委員会委員長が協会会長であり、協会を代表する。

協会規定によれば、運営委員会にはかなりの権限が与えられている。協会会員になるための要件は、18歳以上の男子で、(ヨルダンまたは外国の)市民権を有し、品行方正であり、協会会員の推薦を受けた者となっている。そして、協会運営委員会が会員としての加入の諾否を決定する権限を有しており、会員として加入して一定期間経過後はじめて運営委員会が同委員会の選挙権および被選挙権を与えていいかどうかの可否を決定する権限も有している(規定第15条)。

協会の議決機関は、総会(al-hay'a al-'amma)であり、年1回開催される。総会が運営委員会委員を秘密投票で選出し、総会議長は運営委員会委員長が務める。

1979年10月26日、協会運営委員会運営委員を選出するための選挙が行われた。運営委員会四役は、委員長ムハンマド・ハーミド・バーミヤ（マサールワ）、副委員長アウダ・アブー・アウダ（グラリーシャ）、会計ラドワーン・ハーミド（マサールワ）、書記長ハサン・マフムード・カンシュ（グラリーシャ）であり（括弧内はハムーラ名）、委員7名のハムーラによる内訳は、パターンジャ5名、マナースラ1名、フメイダート1名であった。つまり、運営委員会のハムーラによる構成は、パターンジャ5名、マサールワ2名、グラリーシャ2名、マナースラ、フメイダートが各1名という結果であった。これは旧アッパースィーヤ村のハムーラの成員数の比率をほぼ反映しているという。ただし、旧村においては最大規模のパターンジャが大きな力を持っていたが、協会では運営委員会四役からも外れている。

ところで、協会の所在地は、アッパースィーヤ出身者が多く住むワハダート難民キャンプ（アンマン）の近くである。このような地理的な条件から、協会はこれまで次のような活動を行ってきた。

まず、村出身者の子弟の教育面での援助である。たとえば、協会では数十人の高校生に補習（数学、英語、アラビア語、化学、物理など）を行っている。これはヨルダンでは大学入学資格試験（タウジーヒー）によって大学進学ができるかが決まるからであり、パレスチナ人子弟にとって大学入学をめぐる厳しい状況があるからであろう。次に、ザカート基金の設立で、この基金により75世帯以上の村出身の家族がこれまで恩恵を被っている。運営委員会がラマダーン月にザカートを集め、それを村出身の貧しいものに分け与えるのである。第3は、運営委員会が、村出身者にそれぞれ専門の医師を紹介し、場合によっては半額で治療を受けることができるようにする。以上2点は不十分な国家による社会保障制度を補うという点で注目される。第4は、運営委員会が年鑑を発行することである。第5は、健全な精神は健全な肉体に宿るという信念のもとスポーツを振興する。これまで、協会が卓球大会を開催し、協会会長がチャンピオンにカップを授与した。

以上の活動からわかるように、協会の目的は、①高校入学後の学生への援

助、②あらゆる援助を必要としている村出身者への支援（社会保障の補填的役割）、③協会会員の間で生じた問題や紛争の解決、と規定している（協会規定第3条）。しかし、国家の介入を招く可能性があり、きわめてナイーヴな問題である政治的・宗教的（*dīniya*）・宗派的（*tā'ifiya*）分野での活動は行わない旨を明記している（同第4条）。さらに、協会はアッパースィーヤ村出身者の相互扶助（*ta'āwun*）や慈善（*khayrīya*）のための組織であると同時に、コミュニケーションの場でもある。

現在、ヨルダンにはパレスチナ出身者による相互扶助や慈善のための組織は非常に多く存在する。残念ながら、前述のように、管見の限りではこのような同郷組織について研究はほとんど行われていないと思われる。このような組織の具体的な実態を、本稿で扱ったアッパースィーヤ村の同郷組織以外、まったく把握できていないので一般化は慎まなければならない。しかし、筆者がここで強調したいことは、「アッパースィーヤ村民協会」の設立は、ワハダート難民キャンプに生きてきたアッパースィーヤ村出身者のパレスチナ人であることの確認にとってきわめて重要な意味をもっているのではないか、ということである。なぜなら、ワハダート難民キャンプは1970年「黒い9月」内戦のときは激戦区のひとつであったのであり、また、それ以前には「ワハダート共和国」と呼ばれていたからである。この時には「共和国」の主人公はPLOであった。しかし71年以降、ヨルダンに住むパレスチナ人がパレスチナ問題を政治的なレベルで語ることは許されなくなった。そうした状況のなかで、今度は「アッパースィーヤ村」が「復活」したのである。これはたとえ政治的な活動は行わなくともヨルダンにおけるパレスチナ人にとってパレスチナ人アイデンティティーの確認の新たな拠り所になると考えられる。また、アッパースィーヤ村出身の多くの人はヨルダン以外の地域で働いており、そのような人々にとってもコミュニケーション・センターの役割を果たしている。

また、村の「復活」はハムーラという父方単系親族集団を動員の原則として行われた。もちろん、離散パレスチナ人の社会集団はさまざまなレベル



で形成されているのであり、ハムーラという回路のみを強調しすぎることは誤解を招くおそれがある。実際は、PLOという政治的組織に結集していったパレスチナ解放運動指導者である知識人たちは、ハムーラの・村的な集団原理に批判的な姿勢をとり続け、そのような古い集団原理を克服した新しい集団を築こうとしたことはよく知られている。しかし、PLOの指導を支えているのは難民キャンプに暮すパレスチナ人である。問題は政治指導とその指導の場であるキャンプの関係をどのようにとらえるかである。つまりここで確認しておきたいのは、パレスチナ人の村がハムーラを軸として「復活」したとしても、それは決して「伝統」への単純な回帰ではありえないということである。離散パレスチナ人にとって、伝統的「共同体」の基礎となるべき土地から切り離された以上は社会的存在のあり方もそれに対応する社会意識のあり方も旧来のままではありえないのである。したがって、ハムーラも、また、ハムーラの刻印を帯びた社会意識も、ヒシャーム・シャラービーが提唱している「跛行的な発展のもとで近代化された家父長制」、すなわち、「新家父長制」Neopatriarchy<sup>(57)</sup>をもとり入れて検討されるべきであり、その新しい社会的意味を探ることが今後の課題となろう。

## おわりに

本稿では、一人のパレスチナ人の体験の追体験を通して、離散前のパレスチナの具体的イメージとしての「村」を再現し、離散後のキャンプでのパレスチナ人の社会意識のあり方を、離散を取り巻く外的な環境との関係で位置づけた。さらに、同郷組織の設立という事例を通してアンマンという離散の地におけるパレスチナの「村」の「復活」の意味を探ろうと試みた。

その際、筆者はパレスチナ解放運動の歴史的諸段階を捨象した。それは次の理由によってである。周知のとおり、パレスチナ解放運動は1967年戦争後に活発化し、1970年には「黒い九月」内戦という、PLOとヨルダン政府軍

との武力衝突を招いた。ヨルダンに舞台を限定して考えた場合、1967年戦争前後から71年位までが「政治運動」としてのパレスチナ解放運動がパレスチナ民衆を無条件に動員することのできた時期である。それ以外の時期は、基本的には、ヨルダン国内における政治運動は、パレスチナ人のみならず、ヨルダン人でさえも弾圧の対象になった。つまり、ヨルダン国内に住む多くのパレスチナ人たちは1967年戦争前後から70年代はじめまでを除いては「政治運動」としてのパレスチナ解放運動からは切り離されていたのである。もちろん、パレスチナ人たちがパレスチナ解放運動を支持していたかどうかはまったく別次元の議論である。ヨルダンに住む多くのパレスチナ人の若者はフィダイーイになって闘うために、ひそかにヨルダンを離れたことであろうし、パレスチナ人の圧倒的多数は常にPLO指導部を支持してきたであろう。つまり、ヨルダンのパレスチナ人が「政治運動」としてパレスチナ解放運動を支持することが顕在化することはまれであるという現実がある。以上の理由で、筆者はパレスチナ解放運動の歴史的な諸段階を議論の前提から切り離したのである。

以上を前提とすると、「アッパースィーヤ村民協会」が非政治的な相互扶助団体として出発したことの意味が理解できよう。協会がハムーラの有力者たちのイニシアティブで作られたものであることは、最初の協会運営委員会の構成からもわかる。しかし、注意しなければならないことは、ハムーラを核に「協会」＝「村」が再組織化されたから、ハムーラが伝統的な規範として現在でもパレスチナ人の行動を拘束する形で存在することを意味するのではない。そうではなく、むしろ、ハムーラを通して「村」が再組織化された過程が重要なのである。つまり、パレスチナ人の主要な生活の場であるキャンプにハムーラ的な社会構造があったからこそ、ハムーラが再組織化のチャンネルになったにすぎない。したがって、ハムーラが残存しているから離散パレスチナ人の社会は、「伝統的」であり、「近代化」されていないといった議論はパレスチナ人の置かれた現実をほとんど何も語っていないに等しい。そこで「新家父長制」の概念を導入することで、パレスチナ人の社会意識におけ

るハムーラの契機を解明することができるのではないかとすることを提示するに留めた。つまりパレスチナ人社会の家父長制を特徴づけるハムーラは、キャンプというきわめて特殊な状況のなかで維持・再生産されてきたのである。私見では、パレスチナ人は、離散しているが故に、パレスチナと結びつく諸価値を、変化する状況に対応しながら、むしろ積極的に保持し、拡大的に再生産しているのではないかと考えるのである。したがって、「村」の復活も以上のような文脈で理解すべきもののなのである。

結論として、パレスチナ人たちはパレスチナに関連する諸価値を再生産する過程で、自分たちのパレスチナ人としてのアイデンティティを形成していたし、新たな社会意識をも作りあげている。社会的な存在のあり方を規定してきたハムーラも、「村」も、パレスチナ人が離散する瞬間に、パレスチナという土地を失ってその本来的な機能をほとんど喪失してしまったのである。パレスチナ人の社会意識を根底で規定してきたのはパレスチナの「喪失」によってもたらされたさまざまな社会的現実なのである。したがって、パレスチナ人の新たな社会意識は「喪失」したものを回復する過程で形成されるもののなのである。同時に新たな社会意識が「村」の復活を生み、失われた「パレスチナ」を回復するという未来の過程をも規定することになるのである。

[注]

- (1) イスラエルに居住するアラブの村落におけるハムーラの役割をめぐっては、比較的活発に論争が行われているが、それ以外の地域に住むパレスチナ人に関してはほとんど研究蓄積はない。ハムーラ論争に関しては、パレスチナ人として批判的な立場から紹介した次の研究がある。Zureik, Elia, *The Palestinians in Israel: A Study in Internal Colonialism*, London, Routledge & Kegan Paul, 1979, pp.93-94.
- (2) ムフタールの行政的機能をオスマン期、イギリス委任統治期、ヨルダン支配期とを比較しつつ分析した論文として、Baer, Gabriel, "The Office and Functions of the Village Mukhtar," Migdal Joel S. ed., *Palestinian Society and Politics*, Princeton, Princeton University Press, 1980, pp.103-123.
- (3) パレスチナ現代史研究の文献に関しては、東アラブにおける社会変容の諸側面研究会編『文献解題 東アラブ近現代史研究』アジア経済研究所 1989年

所収の第V章「パレスチナ」を参照のこと。ただし、PLOなどのパレスチナ解放運動の研究を含んでいないので、網羅的なものとは言えない。

なお、本稿で使用するパレスチナの地名（アラビア語）の読み方は次の地名事典に従った。Khammār, Qusṭantīn, *asmā' al-amākin wa al-mawāqī' wa al-ma'līm al-ṭabī'īya wa al-bashariya wa al-juġhrafiya al-ma'rūfa fī filasṭīn ḥattā al-'ām 1948* [1948年までのパレスチナの地名], Beirut, al-Mu'assasa al-'Arabīya li-l-Dirāsāt wa al-Nashr, 1980.

- (4) このような研究の方向性の先鞭をつけたのは, Sayigh, Rosemary, *Palestine: From Peasants to Revolutionaries*, London, Zed Press, 1979である。わが国でも最近このような方向をめざした次のような研究が出版された。藤田進『蘇るパレスチナー語りははじめた難民たちの証言』（新しい世界史12）東京大学出版会 1989年。
- (5) フォークロアの分野で注目されるのは民話の収集である。管見の限りでは、次のような研究がある。Sirhān, Nimr, *al-ḥikāya al-sha'bīya al-filasṭīniya* [パレスチナ民話], Beirut, Markaz al-Abḥāth, Munazzamat al-Taḥrīr al-Filasṭīniya [PLO研究センター] (以下, Markaz al-Abḥāthと略記), 1974; al-Sārīsī, 'Umar 'Abd al-Raḥmān, *al-ḥikāya al-sha'bīya fī al-mujtama' al-filasṭīnī: dirāsa wa nuṣūṣ* [パレスチナ社会における民話—研究とテキスト], Beirut, al-Mu'assasa al-'Arabīya, 1980; Idem, *al-ḥikāya al-sha'bīya fī al-mujtama' al-filasṭīnī: al-nuṣūṣ* [パレスチナ社会における民話—テキスト], Amman, Dār al-Karmal, 1984; Khalīlī, 'Alī, *al-baṭl al-filasṭīnī fī al-ḥikāya al-sha'bīya* [民話におけるパレスチナの英雄], Jerusalem, Mu'assasat Ibn Rushd, 1979; Idem, *aghānī al-'amal wa al-'ummāl fī filasṭīn: dirāsa* [パレスチナにおける労働歌と労働者—研究], Jerusalem, Manshūrāt Ṣalaḥ al-Dīn, 1979; 諺, 金言・格言などを収集した研究もある。'Aṭṭallāh, 'Īsā, *qālū fī al-mathal: mawsū'a al-amthāl wa al-ḥikam al-sā'ira nathran wa si'ran* [諺ではかく言う—韻文・散文でのよく知られた諺・格言] 2 Vols, Jerusalem, Jam'iyat al-Dirāsāt al-'Arabīya, 1985; Abū Ḥamda, Muḥammad 'Alī, *al-amthāl al-'ammīya al-filasṭīniya* [パレスチナ民衆の諺], Amman, Maktabat al-Muḥtasib, 1984.

イスラエル占領地においてパレスチナの伝統的な民衆文化を研究し、さらには若者たちにそれを伝えるという目的で創設されたセンターとして、ビーラに「家族復興協会 (Jam'iyat In'āsh al-Uṣra)」があり、ここでは雑誌「遺産と社会」(al-Turāth wa al-Mujtami') が刊行されている。さらに、アンマン在住のニムル・シルハーンはパレスチナのフォークロアに関する資料を収集する研究者であるが、次の文献は彼がアラブ銀行の援助を受けて個人で出版したものである。Sirhān, Nimr, *arshīf al-fuḥklūr al-filasṭīnī* [パレス

- チナ・フォークロア資料], 5 Vols, Amman, 1985, Idem, *mawsū'at al-fuklūr al-filastīnī* [パレスチナ・フォークロア百科], 5 Vols, Amman, 1975-79.
- (6) Markaz al-Wathā'i'q wa al-Abḥāth, Jāmi'at Bīr Zayt, *silṣilat "al-qurā al-filastīniya al-mudammara"*
- このシリーズは現在作業中および計画中のモノグラフも含めると25村となるとのことであるが、筆者は本稿執筆時点で最初出版された4冊のうちデイル・ヤースィーン村を除く「第1冊アイン・ハウド村」「第2冊マジュラド・アスクラーン村」「第3冊サラマ村」の3冊を入手したのみである。
- (7) このような状況において次のような記録が編纂されている。al-Dabbāgh, Mustafā, *bilād nā filastīn* [わが祖国パレスチナ], 11 Vols, Beirut, Dār al-Ṭalī'a, 1972-76; *silṣilat al-mudun al-filastīniya* [パレスチナ都市シリーズ], 27 Vols, Tunis, al-Munazzamat al-'Arabiya li-l-Tarbīya wa al-Thaqāfa wa al-'Ulūm, Dā'irat al-'Ilām wa al-Thaqāfa bi-Munazzamat al-Taḥrīr al-Filastīniya [アラブ教育・文化・科学機関, P L O 広報文化局], 1987-? (ただし、筆者は第13巻以降は未見)
- (8) ただし、筆者がアブー・ムハンマドに出会った時点では、彼にインフォーマントの役割を期待していたわけではなかったし、また、一人のパレスチナ人の個人的な体験を通してパレスチナ人の社会意識の形成を考える意図も持っていなかった。したがって、インフォーマントとしてのアブー・ムハンマドとはアンマン滞在期間中のほとんどはアラビア語の家庭教師またはアンマンにおける生活案内人として接触しただけであった。もちろん、筆者自身は聞き取りに関して専門的な訓練を受けたことはなかったので、アブー・ムハンマドと家族ぐるみでつき合った結果としてアッパースィーヤ村に関心を持ち始めたにすぎない。
- (9) その代表的な研究としては、al-Shaybī, 'Īsā, *al-kiyān al-filastīniya: al-wa'y al-dhātī wa al-taṭṭawur al-mu'assasī 1947-1977* [パレスチナ・エンティティー：パレスチナ人意識と組織的発展], Beirut, Markaz al-Abḥāth, 1979がある。パレスチナ人研究者はパレスチナ・エンティティーという概念を使用してパレスチナ人意識の形成を議論することが多い。この概念は、パレスチナ人難民の離散した状態を克服するための、パレスチナ人としての一体性を示す政治的なスローガンであった。当然のことながら、この概念は国家形成の原型として位置づけられており、パレスチナ解放運動の組織的な進展にともなって「パレスチナ独立国家」(al-Dawla al-Filastīniya al-Mustaqilla) にとって代わられることになった。
- (10) al-Kanafānī, Ghassān, *al-āthār al-kāmila*, Vol.1. al-riwāyāt [小説], Vol. 2. al-qīṣaṣ al-qasīra [短編小説], Vol.3. al-masrahīyāt [戯曲], Vol.4. al-dirāsāt al-adabiya [文学研究] Beirut, Dār al-Ṭalī'a, 1977.

- (11) Kunash, Ḥasan Ḥamūda, *jihād qarya filasṭīniya al-‘Abbāsīya 1921-1948*, Amman, Rābiṭat Ahālī al-‘Abbāsīya, n. d.
- (12) パレスチナ人の地図イメージで最も一般的なのが「ルート図」であることは P L O 研究センターが出版した次の地図帳のいずれも「ルート図」が中心を占めていることから明らかであるように思われる。*kharā'it ṭuruq al-muwāṣalāt fi filasṭīn al-muḥutalla* [占領パレスチナにおける交通道路地図帳], Beirut, Markaz al-Abḥāth, 1969, *kharā'it filasṭīn* [パレスチナ地図帳], Beirut, Markaz al-Abḥāth, 1970.
- (13) PLO Research Center, *Village Statistics 1945 : A Classification of Land and Area Ownership in Palestine*, Beirut, 1970, p. 53.
- (14) Stein, Kenneth, W., *The Land Question in Palestine, 1917-1939*, Chapel Hill, The University of North Carolina Press, 1984, p. 69, p. 229.
- (15) Central Bureau of Statistics, *Statistical Abstract of Israel 1983*, Jerusalem, No. 34, 1983, p. 50.
- (16) *Encyclopaedia Judaica*, Jerusalem, Keter Publishing House, Vol. 16, pp. 730-731.
- (17) Kunash, *op. cit.*, p. 13. パレスチナ地誌に関する大著「わが祖国パレスチナ」を著したダッバークは村名変更を1932年終わりとしているが(al-Dabbāgh, *op. cit.*, Vol. 4, p. 331), ここでは、実際にインタビューを行ったアッパースィヤ村出身の研究者の見解をとった。
- (18) Canaan, Tawfiq, *Muhammedian Saints and Sanctuaries in Palestine*, Reprint Edition, Jerusalem, Ariel, n. d. (Originally 1927), p. 295. カナアーンはこの点について「好奇心をそそるのは、ヤコブの息子たちに関して、中部パレスチナの西側の山中のさまざまな村むらには聖者廟がある」と記しており、その事例のひとつとしてヤフーディーヤ村を挙げている。つまりイスラエルの12氏族にまつわる名称が残っていることになる。
- (19) イェフード（つまり、ヤフーディーヤ）は旧約聖書ではヨシュア記19章45節にダン族の居所として定められ、その記述の正しさは実際考古学的にも発掘で証明されているという説(*Encyclopaedia Judaica*, Vol. 16, p. 730)もある。他方、パレスチナ人研究者ダッバークは、これはカナアーン人による名称で、カナアーン人の時代からイェフードとして知られており、ローマ時代にはオノ(Ono, 委任統治時代の Kufr ‘Āna) 行政区においては Iudaea で知られていた、と説明する(al-Dabbāgh, *op. cit.*, p. 331)。

以上のような諸説があるなかで、イスラエルでカナアーンの論文を編集して、イスラエルの出版社から再版になることはきわめて興味深いことといわなければならない。タウフィーク・カナアーン(1882-1964年)はパレスチナのベイト・ジャーラー(Bayt Jālā, エルサレム近郊)生まれの医師で、ペイ

ルート・アメリカ大学医学部卒業。エルサレムで開業医を営むかたわら、パレスチナのフォークロアについての著作活動を行った。その著作のほとんどは英語かドイツ語で行われた。1928年パレスチナ東洋学協会の会長になり、協会の出す学術雑誌 *Journal of Palestine Oriental Society (JPoS)* の編集長になった (*al-mawsū'a al-filasṭīniya* [パレスチナ百科事典], Damascus, Hay'at al-Mawsū'a al-Filasṭīniya, 1984, Vol. 1, p. 604.)。

(20) Canaan, *op. cit.*, pp. 292.

(22) Kunash, *op. cit.*, p. 17.

(22) *Ibid.*, p. 18. カナアーンは、シッドナー・アリーとナビー・ルービーンの祭りに関しては、夏、すなわち、8月の新月と共に始まるとしており、また、ナビー・サーレフの祭りは春、すなわち、ギリシア正教徒による復活祭の始まる日であり、また、エルサレムで行われるナビー・ムーサーの祭りの最終日でもある金曜日に始まるとしている。ナビー・ルービーンの祭りは1カ月続き、ヤーファ、リッダ、ラムラなどの地域から参詣者が集まり、規模としてはナビー・ムーサーの祭りよりも大きいとしている (Canaan, *op. cit.*, pp. 214-216)。

(23) *Ibid.*, p. 13.

(24) Granott, A., *The Land System in Palestine*, London, Eyre & Spottiswoode, 1952, p. 71. ハムーラのリネージュに関しては、家系樹 (*shajarat al-ḥamūla*) で図示される。ビール・ゼイト大学のプロジェクト (注(6)参照) においても、それぞれの村におけるハムーラの家系樹が描かれている。アッパースィーヤ村の家系樹に関しては知ることができなかった。

(25) 'Arrāf, Shukrī, *al-qarya al-'arabīya al-filasṭīniya: mabunan wa isti'mālāt arāqī* [パレスチナ・アラブの村落—建物と土地利用—], Jerusalem, Jam'iyyat al-Dirāsāt al-'Arabiya, 1986, pp. 11-14.

(26) 大塚久雄「共同体の基礎理論」に基づきながら土地 (財産) 先取の形態とその主体としての共同組織を家族形態との関連で理論的に整理した論文として木村喜博「エジプトにおける共同体—財産先取の形態と主体に関するノート—」(川島武宜・住谷彦編『共同体の比較史的研究』アジア経済研究所 1973年)。

(27) Baer, *op. cit.*, pp. 103-123.

(28) Kunash, *op. cit.*, pp. 14-15.

(29) アッパースィーヤ村の具体的事例は聞くことができなかったが、サラマ村ではこの抗争が報告されている (Kana'ān, Sharīf, *Salama, Bir Zayt, Jāmi'at Bir Zayt*, 1986, p. 53.)。なお、評議会派と反対派の抗争に関しては、拙稿「パレスチナ・アラブ民族運動—1930年代のハーッジ・アミンおよびその他の政治グループの政治的役割—」(伊能武次編『アラブ世界の政治力学』アジア

経済研究所 1985年)を参照。

- (30) 19世紀後半におけるパレスチナの世界資本主義市場への編入に関する実証的な研究として、Schölch, Alexander, "European Penetration and the Economic Development of Palestine, 1956-82," Owen Roger, ed., *Studies in the Economic and Social History of Palestine in the Nineteenth and Twentieth Centuries*, London, Macmillan, 1982, pp. 10-87がある。
- (31) Kunash, *op. cit.*, pp. 20-21.
- (32) *Ibid.*, p. 19.
- (33) Kana'an, *op. cit.*, pp. 53-55.
- (34) モシャヴァーとは、大岩川氏によれば、「第1波移民は、個人所有と個人経営を原理とする入植村(モシャヴァー引用者)を形成した。デカニア創設(キブツの最初の入植村一引用者)の1909年までに、22個のモシャヴァーが建設されている。……労働力には、多量のアラブ人労働者を雇い、ユダヤ人は、ほとんど農業経営者の立場になっていた」(大岩川和正『現代イスラエルの社会経済構造』東京大学出版会 1983年 37-38ページ)。
- (35) *Encyclopaedia Judaica*, Vol. 13, pp. 336-338.
- (36) ビルーはイザヤ書(2:5)「ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう」のヘブライ語の表現の頭文字をとって命名した組織で、ロシアのユダヤ人が1882年結成した。その年、パレスチナに向けて出発し、通常第1波ユダヤ人移民とみなされている(*Encyclopaedia Judaica*, Vol. 4, pp. 998-1002.)。
- (37) al-Sharīf, Māhir, *al-Umamīya al-shuyū'īya wa filastīn, 1919-1928* [コミンテルンとパレスチナ, 1919年-1928年], Beirut, Dār Ibn Khaldūn, 1980, p. 83.
- (38) Kana'an, *op. cit.*, p. 54.
- (39) ハサン・サラーマ(1913-1948年)はリッダ近くのクーラ(al-Qūla)村で生まれ育った。33年のアラブ蜂起の時ヤーファーでデモに参加し、英軍に追われる身になったが、そのような状況の中でも村々を回って、反乱を説いた。36年からの反乱では鉄道・電気・道路網などの破壊活動の指導にあたった。38年の戦闘で重傷を負ったが命はとりとめた。以後、変装のため髭を蓄えたため、人々は彼にシャイフの称号をおくり、生涯そのように呼ばれた。アラブ大反乱後、レバノン、シリアをへて、イラクに行き、ラシード・アリー・ガイラーニーの反乱に参加し、160名のパレスチナ人と共に英軍と闘った。パレスチナ分割決議後、パレスチナに戻り、パレスチナ中部西地区の司令官として活躍し、アブドゥルカーディル・アル・フサイニー・エルサレム地区司令官の戦死した後、エルサレムの司令官もかねた。エルサレムへ水を供給する戦略的拠点ラアス・アル・アイン(Ra's al-'Ayn)をめぐる戦闘で、負傷し、48年6月2日死去した(*al-mawsū'a al-filastīnīya* [パレスチナ百科事



- 典], Damascus, Hay'at al-Mawsū'a al-Filastīniya, 1984, Vol. 2, p.237)。
- (40) Kunash, *op. cit.*, p.31.
- (41) *Ibid.*, p.33.
- (42) ダーレト計画については, Khalidi, Walid, ed., *From Haven to Conquest: Readings in Zionism and the Palestine Problem until 1948*, Beirut, Institute for Palestine Studies, 1971, pp.755-760を参照。
- (43) 以下の記述はクナシュの著書(第3章)と筆者のインフォーマントからの情報に依拠している。Kunash, *op. cit.*, pp.31-50.
- (44) ベルナドッテに関する最近の研究として, Ilan, Amitzur, *Bernadotte in Palestine, 1848: A Study in Contemporary Humanitarian Knight-Errantry*, London, Macmillan, 1989.
- (45) クナシュはこの時の状況を次のように描写している。「零時になった。戦闘員は誰ももの音をたてず, 光もすべて消して村に近づいていった。間近にすべてが見えるようになってもまだ静寂は続いた。突然, 敵に対して東と南の2方面から火の手があがった。銃声とともに, あらゆるところで, 『アッラーフ・アクバル(アッラーは偉大なり)』の声が轟いたのである。」(Kunash, *op. cit.*, p.44.)
- (46) ダルウィーシュ・アッパースィーヤ村代表は, アリー・ガーリブ・アズィーズィー・イラク軍大佐に協力を要請したが次のような回答であったという。すなわち, アッパースィーヤ村が分割案のアラブ国家予定地域の外側にあるのでイラク軍が関与する根拠はなく, 軍事的にはすでに陥落しているので村の戦闘員はすぐに撤退すべきである, と。他方, ヨルダン軍のアフマド・スィドキー・ジュンディー司令官も同じように, 同村はユダヤ軍の優勢にあるので防衛できない, したがって, すぐに撤退するよう忠告し, 食糧を同村代表に提供しただけだった, としている(Kunash, *op. cit.*, pp.46-47.)。
- (47) イスラエルのアラブに関して高い評価を受けている研究として Jiryis, Sabri, *The Arabs in Israel*, New York, Monthly Review Press, 1976がある。
- (48) ヨルダン支配下の西岸やエジプト支配下のガザに関する研究はイスラエルによる両地域占領以降, イスラエルの研究者を中心になされてきた。本稿に関連する英語による最近の研究を挙げると, Plascov, Avi, *The Palestinian Refugees in Jordan 1948-57*, London, Frank Cass, 1981; Morris, Benny, *The Birth of the Palestinian Refugee Problem, 1947-1949*, Cambridge, Cambridge University Press, 1987などがあるが, ただし, 著者の執筆意図と資料操作には注意が必要であろう。
- (49) ヨルダンにおけるパレスチナ人に関しては, Brand, Laurie A., *Palestinians in the Arab World: Institution Building and the Search for State*, New York, Columbia University Press, 1988, pp.149-185を参照されたい。筆者

としては、1970年「黒い九月」事件をPLOとの政治的衝突の視点からのみばかりではなく、パレスチナ人の「疎外感」のレベルからも分析する必要があることを感じている。

- (50) この心理的な矛盾に関しては次の研究を参照のこと。Yūsuf, Shahāda, *al-wāqī' al-filasṭīnī wa al-ḥaraka al-niqābiya* [パレスチナの現実と労働運動], Beirut, Markaz al-Abḥāth, 1973, pp.15-16.

(51) *Ibid.*, pp.16-17.

- (52) 1984年のUNRWAの統計によれば、ヨルダン、西岸、ガザ、レバノン、シリアの登録難民のうちキャンプ内に居住しているものは、登録難民総数203万4314名のうち51万6701名で、約35.2%と低いが、ヨルダン(約25.4%)、西岸(約25.5%)、ガザ(約55.2%)、レバノン(約51.5%)、シリア(約29.6%)と地域によってばらつきがある。ただし、シリアに関しては、ヤルムーク難民キャンプのパレスチナ難民はUNRWAに登録されていないので実際の数字と隔たりがある (*Map of UNRWA's Area of Operations, 30 June 1984*, UNRWA)。

(53) Yūsuf, *op.cit.*, pp.18-20.

(54) *Ibid.*, p.21.

- (55) Sirḥān, Bāsim, “mukhayyamāt al-filasṭīnīyīn (nazra susiyulijīya) [パレスチナ人キャンプ(社会学的考察)],” *Shu'ūn Filasṭīniya*, No.36, August 1974, pp.65-66.

- (56) 本文における事実関係に関しては、Kunash, *op.cit.*, pp.51-66を参照したが、ハムーラに関してはインフォーマントからの情報に依拠している。協会内規原文については、*Ibid.*, pp.59-66に付録として掲載されている。

- (57) Sharabi, Hisham, *Neopatriarchy: A Theory of Distorted Change in Arab Society*, New York, Oxford University Press, 1988.